

言語接触からみた日韓隣接地域の言語景観*

李舜炯**・李賢貞***

〈 Abstract 〉

Language contacts occurring within linguistic landscape in neighboring regions of Korea and Japan

This study is conducted to discuss and analyze language contact phenomena focusing on the linguistic landscape of regions in Korea and Japan, that lie close to each other. The main findings are as follows:

1. Korean origin loanwords used in Japan and Japanese origin loanwords used in Korea share a common characteristic that most these words are related to food-dietary life. Korean origin loanwords used in Japan have an additional note in Katakana written above the corresponding Korean words while Japanese origin loanwords used in Korea are written next to Korean words.

2. The study has clarified the spread of the Korean dialect type. Both 지짐[isidzim] and 저래기[tsaregi] are dialects originating from Kyeongbuk Province in Korea, and are being used as Korean origin loanwords as a result of language transfer and contact in Japan. The usage of these words is not limited to Japan but have also expanded to Jeilongjiang Province in China and Pyeongan Province in North Korea. Such a phenomenon clearly shows the signs of linguistic expansion in which words travel across borders and spread to neighboring countries.

3. The use of Japanese origin loanwords used in Korea are prominently those that underwent the secondary derivation, such as 작크[tsaku] and 추리닝[tsurinin]. The secondary loanwords such as 테이크아웃 'take out' are continued to be used in present days.

4. The use of loanwords related to 'food-dietary life' is found in all types of the language contact phenomenon according to the report on current usage of loanwords categorized by their meanings. Also, the result displayed that 'words related to humans' are the most used among 'concept nouns' and loanwords in 'daily supplies' are limited to those that underwent the secondary derivation. Both findings evidently support the result of preceding studies. Overall, the result confirmed that Hangeul-Japanese words (Japanese words written in Hangeul) are used in various forms within their semantic category. These findings clarify that the usage of these loanwords is concentrated on those closely related to daily life.

Field : Sociolinguistics

Keywords : Linguistic landscape, Language contact, Secondary loanwords, Korean written in katakana,
Japanese written in hangeul

* This work was supported by the Ministry of Education of the Republic of Korea and the National Research Foundation of Korea(NRF-2019S1A5A2 A03043546).

本稿は韓国日本語学会2020年第41・42回国際学術大会で口頭発表した内容を修正・加筆したものである。

** 慶北大学校 人文学術院 研究員, 社会言語学, First Author

*** 慶北大学校 日語日文学科 講師, 社会言語学, Co-author

1. はじめに

人と人、文化と文化、民族と民族の交流や接触は、言語に音韻、意味、形態などで言語的痕跡を残すことが多い。本稿の調査対象地のひとつである対馬は長崎県の島であるものの韓国からも近いため、歴史的交流のみならず言語的交流や接触が多かった地域として知られている。小倉(오구라2009:33)では、「朝鮮の『고구마[koguma]:孝行芋、薩摩芋』が日本の対馬方言から入ってきた」ことまでも記録されている。今や「고구마[koguma]が日本語から借用されたことすら知らない人が多いほど、韓国語に完全に同化している。任洪彬(임홍빈2008:27)では、「従来、同化の度合いによって外来語と借用語を区別する傾向が強いが、その必要はなく外来語の言語学的な言い方が借用語であると指摘している。そして、韓国語(ウリマル)文脈にハングル字母で書かれているだけ、あるいは字母による韓国語音韻で発音されるだけでも韓国語に同化されたと見なせる」と示されている。また、金恩希(2004:16)では、「借用語は二つの集団の接触の状況を端的に物語る文化接触の産物で文化的に均衡してくると、借用語も減少するようになる」と述べられている。さらに、陣内(2007:8)では、「外来語とは、日本語という言語が欧米語(現在ではほとんど英語)を目標言語とし、とりあえず単語レベルで無数に作り出されている「中間言語」にほかならない」と主張されている。そして、ロング(2013:135)では、「異った言語を話す人々が接触しコミュニケーションをするときに言語接触が起こり、その結果、様々な言語現象が起き、個人レベルでは、中間言語、フォリナートーク、コード切り替えなどが見られ、言語体系レベルでは借用語、ピジン、クレオール、混合言語などの言語接触現象が起きる」と指摘されている。

そこで本稿では、日韓隣接地域における書かれている文字言語による言語景観に注目する¹⁾。そして、日本語に入った韓国語起源借用語、韓国語に入った日本語起源借用語や二次借用語およびカナ表記韓国語、ハングル表記日本語などの言語接触現象について分析・考察し、その特徴を明らかにすることを研究目的とする。

2. 先行研究の検討および研究課題

言語景観は「言語意識のパロメーターであり、社会言語学現象(ロング2011:11)」として、「社会分析ツール(高岡2011:145)」として、言語、文化、生活などを把握するための有効な手段であることは周知のことである。その影響で、言語景観研究は多角的な観点から研究が行われてきた。特に、ここ数年、韓国国内での多言語表示や文字種に関する言語景観研究は継続的に注目を集めている(李舜炯2011、市島2011、오미경2014、趙恩英2017、李慈鎬2020など)。そして、歴史社会言語学的な視点(彭国躍:2018、梁敏鎬2020など)、言語表現論的な視点(李舜炯2018、李賢貞・李舜炯2020など)、日本語教育学的な視点(李舜炯2019b、磯野2020など)、地域社会の言語環境的な視点(吹原・松崎・磯野・助川2019、孫美貞・李承珉2020など)、観光資源論的な視点(ロング2020、斎藤2020)など、ここ2、3年だけでも言語景観研究は社会

1) 言語景観は書かれている文字言語によるものと、社内放送やスピーカーから流れる音声言語による言語景観に大別される。「言語景観というのは「公的空間で無意識にみる書記言語」で民間企業や行政が設置した看板や標識がその代表的なものである。またはそうした表示の集合体である。書記言語である意味において、言語景観は「音の景観=Soundscape」という概念と対立する(ロング2018b:51-52)」を参照されたい。

言語学の一分野として無限なる可能性が試されつつある。

本稿では言語接触という観点から韓国語に入った日本語起源借用語や二次借用語およびカナ表記韓国語、ハングル表記日本語などや日本語に入った韓国語起源借用語などの言語接触現象に注目している。そこでまず、ここでは本稿と直接的に関連性が深い韓国国内の言語景観において日本語のハングル表記やカナ表記が急増する現象を受け、実践的分析をしている李舜炯(2019a)、李賢貞(2019)および言語景観を主に対象にしているわけではないが言語伝播という観点から日本に進出した韓国語について言及している梁敏鎬(2019)の主張を概観する。

まず李舜炯(2019a)では、言語接触の観点から同じく大邱広域市の日本語の言語景観を対象に、音声・音韻、表記、語彙の特徴について分析している。その結果、韓国でありながら日本との関連性を表すカナ表記日本語が最も多かったことが報告されている。その次に、ハングル表記日本語が多く、その際は音声・音韻上に母語干渉、文字表記と言語意味のずれという中間言語的特徴など、言語接触が指摘されている。さらに、飲食関係の商業看板が大部分であったにもかかわらず、「衣食住語彙」以外に人名や地名の使用も多くなりつつあると述べている。

また李賢貞(2019)では、大邱広域市の大型スーパーの日本語言語景観の現況について分析、考察を行い、街の言語景観同様に食品・酒類では日本語を韓国語に訳さず、日本語の原音のまま表記する傾向が強いと主張している。しかし、興味深いことに同空間の大型スーパーの商品であっても、生活用品類では、日本語の原音を表記するよりは、商品が指す意味や用途が表記される場合が多いことを指摘し、販売商品による日本語表記が一様ではないことを明らかにしている。

さらに양민호(2019)では、言語交流と伝播という観点から韓国の舶来語と日本進出の外行語について分析考察している。地理的近接効果という言語伝播の原理に従い、韓国から渡って日本の九州地域に上陸した韓国語が相当数存在している(p.112)と言及されており、その事例として「メンタイ」「ミンタイ」「チング」「チャリンコ」「キサン」「ヌクテ」「オンドル」などが取り上げられている。対象語彙が言語景観にみられる語彙とは限らないが、「日本はもっとも近い外国でありながら、日本国内での外行語の語彙研究はほとんど見当たらない(p.116)」という指摘は、本稿での主張と似通うところが多いと考えられる。

以上の先行研究の検討から、以下のような傾向が明らかになっている。

①街の言語景観と大型スーパーの言語景観から「食品・食生活」に関連してはカナ表記日本語やハングル表記日本語が多いが、一方では、「衣食住語彙」以外に人名・地名に関連した「人間語彙」「時間・空間語彙」においての日本語表記も増えつつあること。

②「生活用品類」では日本語表記はあまりせず、その意味や用途を表すこと。

③ハングル表記という言語接触した形が用いられると、音声・音韻に影響が与えられること。

④韓国語の意味を日本語にカナ表記した置き換え型構造の中間言語的特徴があること。

⑤日本語に入った韓国語について研究する必要があること。

そこで、本稿では上記の先行研究の結果を踏まえ、言語景観を対象に言語接触の観点から以下のような研究課題を立て論を進める。

(1)韓国におけるハングル表記日本語、日本におけるカナ表記韓国語はもちろん両国に入った借用語の語彙の使用に注目する。

(2)「食品・食生活」「生活用品」「人名・地名」語彙を含め、使用語彙の意味カテゴリと類型の關係に注目する。

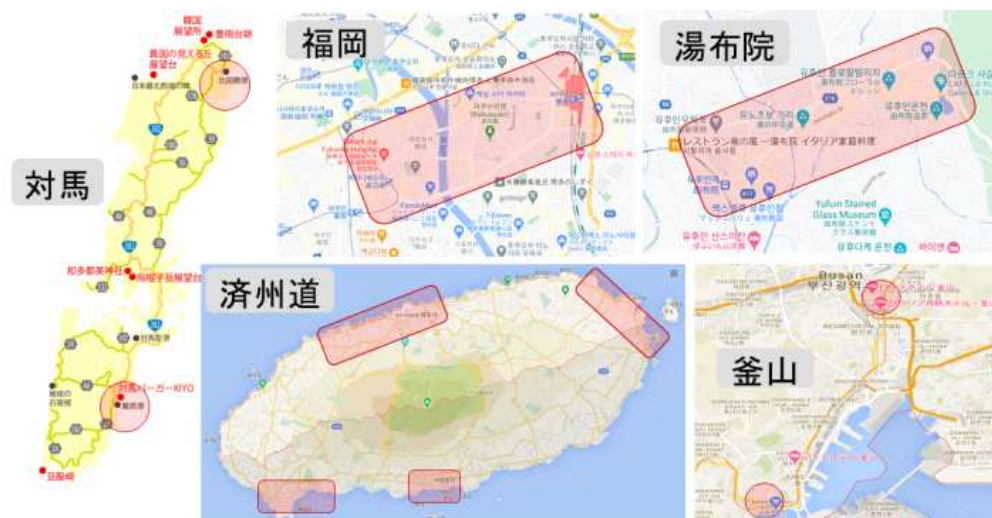
(3)ハングル表記という言語接触した形が用いられると、音声・音韻に影響が与えられるが、それ以外の意味・形態においてはどのような影響が生じるのか注目する。

具体的には、以下3.で研究方法、4.では日本語に入った韓国語起源借用語とカナ表記韓国語、5.では韓国語に入った日本語起源借用語とハングル表記日本語、6.では言語的ディアスポラ:地域方言の拡散、7.では保持され続ける二次借用語、8.意味カテゴリ別にみた言語接触現象について、それぞれ考察を行う。

3. 研究方法

3.1 調査地域

調査地域は、図1に示す釜山から航路1時間くらいの地理的に近接していて、日韓の交流、接触が多い福岡・湯布院・対馬、釜山・済州島である。日韓隣接地域を調査した理由は、日韓の往来も多く、言語接触現象が含まれている言語景観の観察も容易であるからである。



〈図1〉調査地域

3.2 調査期間と調査方法

調査期間は2019年8月から2020年8月までで、調査は全4回行った。調査方法は、現地にて調査対象を撮影し、撮影した画像を分析し、研究目的に沿って考察する手順を踏んだ。

3.3 調査対象

本稿では、公共空間における看板、張り紙、ステッカ、案内表示、商品などで自然に目に入る文字言語による言語景観を調査する。具体的には、次の表1のように分類した日本語起源借用語、二次借用語、ハングル表記日本語、韓国語起源借用語、カナ表記韓国語などの言語接触現象に注目する。

〈表1〉 本稿の調査対象

言語接触現象	表記言語	(国語・百科) 辞書に掲載	日常、音声言 語で使用	日常、文字言 語で使用	具体例
日本語起源借用語	ハングル	○	○	○	스시, 레지...
二次借用語	ハングル・ ローマ字	○	○	○	주리닝, Take out...
ハングル表記日本語	ハングル	×	△	○	야끼니꾸, 이자 카야...
韓国語起源借用語	カナ文字	○	○	○	チング, チヂ ミ...
カナ表記韓国語	カナ文字	×	△	○	チメック, オ ソオセヨ...

(△：関係者や利用者限定で使用されている)

4. 日本語に入った韓国語起源借用語とカナ表記韓国語

2.で先述したコードスイッチング、フォリナートーク、借用語などの口語言語による言語接触現象だけではなく、文字言語による視覚コミュニケーションの言語景観からも言語接触現象は確認できる。次の図2は、釜山からフェリーで1時間の距離にある対馬市厳原町にある店名で、韓国語「친구야:友よ」から借用された日本語「ちんぐ屋」の看板である。地理的關係から対馬方言と韓国語との間には借用語という共通性が古くから知られているが、言語景観にみられる借用語からもその言語的交流や接触がみられた²⁾。



〈図2〉 韓国語起源借用語「ちんぐ屋」



〈図3〉 カナ表記韓国語「チメック」

また、日本語に入った韓国語起源借用語として、「キムチ」「カルビ」「プルコギ」「サムギョプサル」「サンチュ」「チゲ」「マッコリ」などの飲食に関する名詞(以下、飲食名詞)がよく知られている

2) 「チング(友達)」以外には、「チングィ(友達)」は「ヤンバン(金持ち)」「トーマンカットタ(夜逃げ)」「ハンガチ(ひとつ)」「チョコマン(小さい)」「パッチ(ズボン)」などが韓国語起源借用語として知られている。

が、今回、対馬での言語景観調査からも同類の飲食関係名詞が確認できた。上記の図3に示したように、「チキン」+「メクチュ:(ビールのこと)」の合成語である「チメック」というカナ表記優先韓国語もみられた。「チメック」は韓国でも標準国語大辞典にも載っていないほど新しい語彙であるが、海を渡った対馬でも使用されている。実際、対馬以外にも大阪や東京の新宿に続き、新大久保でも新店舗ができており、今後、その使用が広がる可能性が窺える³⁾。

さらに、対馬ではルビ補助式のカナ表記韓国語の言語景観がみられるが、図4「いらっしやいませ^{オソオセヨ}」という歓迎表現と、図5「^{カザン インキ マシッソ} 가장 인기 맛있어 一番 人気 おいしい」という販売商品に対する紹介表現がそれである。先述した図2の「友よ」を意味する「ちんぐ屋・チングヤ」を含め、図5の「^{カザン インキ マシッソ} 가장 인기 맛있어 一番 人気 おいしい」などの、くだけた言い方で表示される表現は、使用数も少なく改まりの度合いも低いものの、親近感を表す慣用句や語彙がカナ表記で言語景観に使用されていることが確認できた。



〈図4〉ルビ補助式のカナ表記韓国語



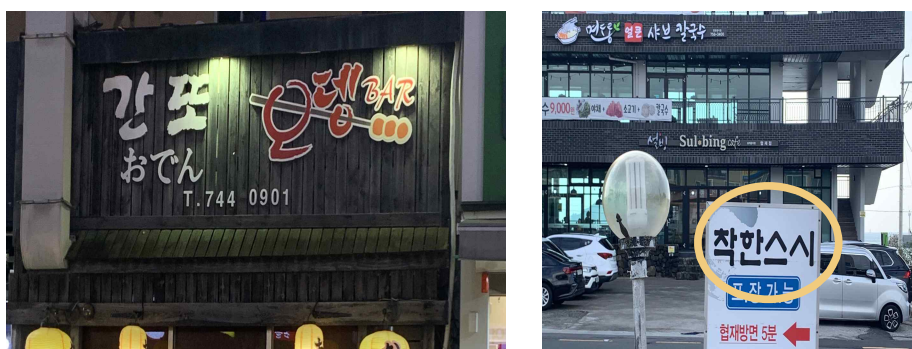
〈図5〉ルビ補助式のカナ表記韓国語

特に、注目できる点は、両方とも日本語の意味以外に韓国語の母音やパッチムなどが日本語の音韻構造に合わせられ、ルビ補助式のカタカナ表記韓国語になっていることである。しかし、このルビ補助式のカナ表記韓国語は誰のために書かれた文字言語であるかを考えてみる必要がある。どちらも韓国語で大きく表示されているので、一見、韓国人向けだと考えがちであるが、店の店員さんへのインタビューから韓国人向けではなく、韓国人を迎える日本人向けの言語景観であるという説明だったので、日本人向けの言語景観であることには間違いのないようである。図4の「いらっしやいませ^{オソオセヨ}」は対馬観光物産協会が制作したステッカーで街のあちこちで見られる文字言語であった。韓国人観光客が多く訪れる対馬だからこそ観光推進のために出されたものであろう。また、図5の「^{カザン インキ マシッソ} 가장 인기 맛있어 一番 人気 おいしい」の文字言語は、観光協会が運営する物産店の中に張られた文字言語である。ここで注目したい点は「カザン インキ マシッソ」というルビこれは韓国語の知らない日本人の店員やオーナーが韓国語で韓国人観光客に対応できるようにするために書かれた気配りの現れだと推察される。

3) ブログにも「チキン&ビールのチメックという言葉もだいぶ馴染んできたのでは?」という意見が寄せられるぐらいである(<https://chezlize.com/tabasaru-ku-shinokubo01/>)。また、インスタグラムなどでも「チメック」という表記以外に「#チメック」「#チメク」「#チメック+チメック」セット表記など、表記のゆれも確認できている。ゆれがあるのは定着していない証拠であるが、チメックのお店が増える可能性も多分であり、今後、形式が収斂していくと推察される。

5. 韓国語に入った日本語起源借用語とハングル表記日本語

2.で言及したように、大邱の言語景観に日本語の使用が急増しており、そのほとんどが食文化に関するものであることが指摘されている(李舜炯:2019a、李賢貞:2019)。今回の釜山と済州道の言語景観調査からも次の図6に示すように、「돈까스(トンカツ)、스시(すし)、우동(うどん)、샤브샤브(しゃぶしゃぶ)、오뎅(おでん)」など、韓国に渡ってきた日本語起源借用語においても食品・食生活に関わるものが主流をなしていることが確認できた。



〈図6〉日本語起源借用語 「오뎅(おでん)」と「스시(すし)」

また、ハングル表記日本語においても、次の図7に示すように「야끼니꾸(焼肉)、이자카야(いざかや)、돈부리(どんぶり)、사케(さけ)、와규(和牛)、오코노미야끼(お好み焼き)、타코야끼(たこ焼き)」など食品・食生活に関するものや食文化と関連する場所などを表す日本語が、ハングルで表記され釜山・済州道の言語景観に示されている場合が最も多かった。



〈図7〉ハングル表記日本語 「야끼니꾸(焼肉)」と「이자카야(IZAKAYA)」

ただ、次の図8、図9のように食文化とは直接には関係のない意味のハングル表記日本語もみられた。中古名品店で使用されている「고이비토(こいびと)」や「타비타비(たびたび)」「유끼(ゆき)」「마이도(まいど)」という看板の言語景観がそれに当たる。これらは4つとも販売している商品との直接的な関わりがないものの使用されていると考えられる。おそらく、先行研究で指摘されている日本風

の雰囲気を作り出すために、または「타비타비(たびたび)」「마이도(まいど)」のように集客を呼びかけるニュアンスがあるために使用されているように考えられる。その一例として、図9の「타비타비(たびたび)」の看板には、「타비타비(たびたび)」の日本語意味、日本語であること、頻繁に寄ってくださることを願う気持ちなどが追加説明で書かれている。



〈図8〉 ハングル表記日本語(単独)



〈図9〉 ハングル表記日本語 (カナ併記)

また、図8のようにハングル表記日本語による「고이비토」の場合、「코이비토」ではなく韓国語語彙の語頭には激音が来ないという韓国語の音韻規則に合わせて「고이비토」と表記されている。これは、図9の「たびたび」とカナ併記し韓国語の音韻規則に従わず語頭に激音で表記されている「타비타비」に比べ日本語という意識が少ないことが窺える。このように、ハングル表記日本語においても定着や同化の差がみられるが、韓国人に向けられた言語景観であることには同一である。

さらに、注目したいハングル表記日本語は、次の図10「우미노식탁(海の食卓)」「아루요(あるよ)」のように、語彙的借用ではなく文型構造的な借用ともいえるパターンである。「우미노식탁(海の食卓)」では、「名詞+の+名詞」という助詞「の」を音借用して使用している。また、文末の強調のニュアンスを表す終助詞「よ」がハングル表記で表示されるものも特徴的である。



〈図10〉 文型構造的な借用のハングル表記日本語「우미노(海の)」と「아루요(あるよ)」

以上の図8から図10は、表記の仕方や借用の対象範囲に異同はあるものの、伝えたいメッセージをハングル表記日本語で書き出すことにより、日本語への関心や好感の気持ちが言語景観に反映されているという点では類似した傾向を見せているといえよう。

6. 言語的ディアスポラ：地域方言の拡散

先述の양민호(2019:116)では「日本国内での(韓国語)外行語の語彙研究がほとんど見当たらない」ことが言及されているが、食文化関連語彙や最近の韓流ブームに伴うドラマや映画などのサブカルチャー関連の韓国語が話題になっているにも関わらず研究対象にまでは至っていないのが現状のようである。

4.で日本の言語景観にみられる韓国語起源借用語やカナ表記韓国語は食文化に関連する傾向があると指摘したが、次の図11「チヂミ」、図12「チョレギ」もその例のひとつである。



〈図11〉「チヂミ」湯布院



図12 「チョレギ」対馬



〈図13〉「머구리[mareuri]」済州

ここで注目したいのは、図11と図12の「チヂミ」も「チョレギ」も、日本では広く知られている韓国語起源借用語であるが、韓国では日本ほど広く知られていないことである。なぜなら、それは韓国国内でも地域による変種が多いことと、韓国南部の慶尚北道方言「지짐[tsidzim]」「저래기[tsaregi]」が移住、交流と接触とともに日本語に入り韓国語起源借用語になったからである。特に「チヂミ」の「지짐[tsidzim]」はパッチムのある閉音節構造であるが、現地語である日本語の開音節構造に合わせられ、「チヂミ」の語形で定着した韓国語起源借用語である。現代日本語では使用しない四つ仮名表記になっており、2015年にNHKでその表記について話題になったこともある⁴⁾。また「チョレギ」は、日本では商品名とともに全国的に使用されているが、「チヂミ」と同様に、発表者たちのような慶尚道方言話者以外は知らない人が多いだろう。まさに、韓国人は知らない、でも日本人は知っている韓国語起源借用語なのである。また、次の図14の旅図で示すように、「チヂミ」と「チョレギ」は、日本に渡っただけでなく、中国の黒竜江省や北朝鮮の平安道などでもそれぞれ使用されているという⁵⁾⁶⁾。

先述の金恩希(2004:16)では、「借用語は二つの集団の接触の状況を端的に物語ること、借用語を通じて言語の接触や借用のプロセスを探ることがきる」と指摘されている。韓国慶尚道の地域方言が海を渡った日本での在日朝鮮人の集団を中心に、または遠い大陸の中国黒竜江省の延辺朝鮮族の集団を中心に使用されていたことが言語の借用状況から窺える。まさに異なる集団の接触の状況をこの「チヂミ」と「チョレギ」が物語っていると考えられる。

4) https://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/20150801_3.html

5) <https://opendict.korean.go.kr/search/지짐>

6) <https://opendict.korean.go.kr/search/저래기>



＜図14＞ 「チヂミ」「チョレギ」「モグル」の旅図

逆に、上記図13の「머구리[mΛ9uri]」は済州道で撮られた言語景観であるが、一説によると日本語の「潜る」という意味の動詞「モグル[mΛ9uru]」が韓国ではダイバーの意味の名詞「머구리[mΛ9uri]」という形に変用されている⁷⁾。現時点で済州道以外にソウル、江陵、浦項などで「머구리[mΛ9uri]」という言語景観が確認されているがやはり海に近い地域集団での使用が目立つようである。海を渡った韓国語起源借用語や日本語起源借用語が言語使用者の日常生活のなかでともに生きているのである。

一方、日本国内では「モグル」は東京から1000キロ離れた東京都小笠原諸島では「ムグル」という母音交替形で定着し使用されている。言葉は一人歩きする生き物であるとよく言われるが、韓国南部の地域方言が韓半島の周辺国へと旅し、また、日本語が韓半島全国を旅するいわゆる日本語の言語的ディアスポラ現象がみられる⁸⁾。

7. 保持され続ける二次借用語

韓国語には日本の支配による密着借用語⁹⁾が多かった。日帝強占期に流入し定着してしまった日本語

7) 「モグル」は熊本方言などの方言として知られているようである。

www.kumamotokokufu-h.ed.jp > kumamoto > hougen

8) 「言語的ディアスポラ」は、第5回「アジア・太平洋の日本語と日本語教育を考える会」公開研究会の企画テーマ「太平洋地域における日本語の言語的ディアスポラ」からの援用である。

本稿でいう「言語的ディアスポラ」は、韓国や日本の地域方言が越境し、ある特定の集団を中心に使い始められ、以後拡散される傾向を見せる意味で使用する。ただし、査読者の指摘のように、「言語的ディアスポラ」は歴社会言語学的な考証と資料を要する部分である。今後、別稿を通し歴社会言語学的観点からの議論を深めていきたい。

9) 任洪彬(임홍빈2008:20)では「韓国では日帝強占期に日本語起源借用語が大量に韓国語に浸透したが、これは

を追放するために、国家政策として「国語醇化運動」が4次にかけて行われ、総1,221語の醇化対象語を公示されている。

韓国で使用されている日本語借用語の特徴のひとつとして、日本語経由で借用された二次借用語が挙げられる¹⁰⁾。図15は、釜山国際市場の言語景観である。注目できる点は「데파트(デパート)」「작크(チャック)」「추리닝/쥬리닝(トレーニング)」の3つとも二次借用語である。



〈図 15〉「東亞デパート」「작크チャック」「추리닝/쥬리닝 트레이닝」釜山

〈図 16〉「레지레지」湯布院

「데파트(デパート)」は、次の表2でみられるように1999年の辞書からは姿を消し、「百貨店」という漢語しか残っていない。しかし、実際は言語景観から確認できるように50年以上釜山市民の日常生活を支えてきている。また、「작크(チャック)」も「추리닝/쥬리닝(トレーニング)」も醇化対象語になっているにもかかわらず、未だに使用されている。

一方、図16「레지(レジ)」は湯布院で見かけた言語景観であるが、日本語では図からも確認できるように「キャッシュレジスター、または店舗でキャッシュレジスターを置いてある区画」の意味で使用されている。しかし、韓国語では、『標準国語大辞典』に載っている日本語158語のひとつとして認められているものの、日本語の本来の意味範疇とは重ならなくなる変化が起き、「喫茶店で働く女性従業員」の意味へと意味推移¹¹⁾が起こった日本語経由の二次借用語である。

Bloomfield(1933)の「密着借用(intimate borrow)」に該当するもので、征服、併合、移住による支配民族と被支配民族の間でなされる言語的借用のこと」と述べられている。

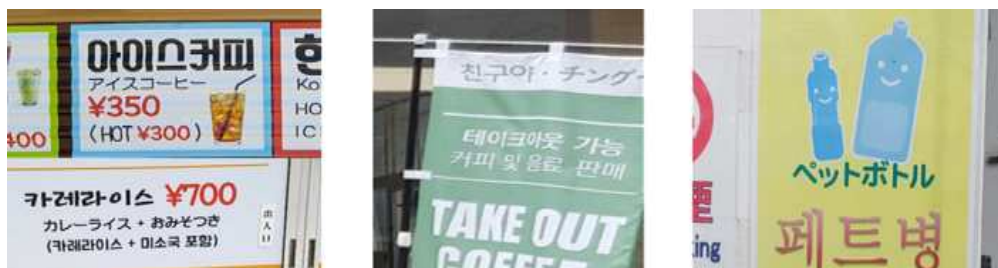
10) 今村・ロング(2019)に従い、欧米語などが日本語経由で入った借用語を「二次借用語」と称する。

11) 今村・ロング(2020:160)は「意味領域が広まる拡張や縮まる縮小と異なり、意味範疇が本来のものと重ならなくなる変化」と記する。また、ロング(2018:322)は「意味論的推移」「編流」ともいう。

〈表2〉二次借用語の借用変遷

原語	朝和兩引モダン朝鮮 外来語辞典 (1937)	韓国外來語辞典 (1970)	標準国語大事典 (1999)	우리말샘 (2016)
department store ↓ デパート	떼파(一)트[tepʰa:tʰu]	디파트먼트[tipʰatʰumantʰu] 백화점(百貨店) 테파트[tepʰatʰu]	백화점(百貨店)	백화점(百貨店)
chack ↓ チャック		자꾸[tsakü]	자꾸[tsakü] 지퍼[tsipʰa]	지퍼[tsipʰa] 자꾸[tsakü] 醇化対象語
training ↓ トレーニング	트레—닝[tʰureŋiŋ] 트레이닝[tʰureŋiŋ]	트레이닝(팬즈) [tʰureŋiŋ]	추리닝[tsʰurinŋ]	추리닝[tsʰurinŋ] 醇化対象語
register ↓ レジ	레지스터[redziʰutʰa] 레지스타[redziʰutʰa]	레지[redzi]	레지[redzi] :日本語	레지[redzi] :日本語

しかし、上記の表2のように、二次借用語は、辞書から姿を消したり醇化対象語になったり意味が変化したりしても、その使用が過去のものになっているとは言い切れない。次の図17は対馬の言語景観ではあるが、言語景観に示されている「카레라이스(カレーライス)」「아이스커피(アイスコーヒー)」はもちろん、「테이크아웃(テイクアウト)」「페트병(ペットボトル)」など、その使用は決して過去のものではなく、現在進行形であることが分かる。



〈図17〉現在進行形である二次借用語の例

8. 意味カテゴリ別にみた言語接触現象

上述の2.の先行研究の検討で「食品・食生活」に関連してはカナ表記日本語やハングル表記日本語が多いが、それとは対照的に「生活用品類」では日本語表記の代わりにその意味や用途を表すことを指摘した。これは意味カテゴリによって言語使用が一様ではないことを意味するであろう。

そこで、本章では日韓隣接地域における言語景観にみる言語接触現象の意味カテゴリ別使用状況を把握するために、両言語に入っている言語接触現象を意味カテゴリ別に分類し、次の表3のようにまとめた。()内の数字は類型の異なり語数を表し、数字が表記されていないものはその類型の具体例が一回しか現れなかったことを意味する。

〈表3〉言語景観にみる言語接触現象の意味カテゴリ別使用状況 (数字は異なり語数)

類型 意味カテゴリ	韓国語起源 借用語	カナ表記 韓国語	日本語起源 借用語	二次 借用語	ハングル表記 日本語
食品・食生活	チヂミ, チョレギ (2)	チメック	돈까스, 스키, 우동, 샤브샤브, 오뎅,ほか (11)	테이크아웃, 아이스크림, 카레라이스,ほか (4)	와규, 가쓰오, 카베츠, 텐동, 가라아게,ほか (40)
概念名詞	チングヤ/ちんぐ屋	オモニ(お母さん), インキ(人気) (2)	머구리	칼라, 리뉴얼, 리폼, 스페셜 (4)	오토코, 고이비토, 겐짱, 하 나 비,ほか (11)
場所・地名				센타, 데파트 (2)	이자카야, 우쿠야, 마썸리야 (3)
服飾・美容				츄리닝, 유니폼, 아이롱파마,ほか (6)	
生活用品				미싱, 카렌다, 미니루, 라 이 타,ほか (5)	
副詞		ガザン(一番)			타비타비, 이썸모, 유루유루, 카라카라 (4)
植物・自然			소라		우미, 기구 (2)
宗教・伝説					예비수, 오니 (2)
乗り物			자전차	리아커	
土木・建築				사지	아카렌가
遊び・娯楽			가라오케		
動詞					아루
形容詞		마시썬 (おいしい)			오사네
助詞(終助詞)					노(~の), 요(~よ)
表現		오소 오세요 (いらっしゃいませ)			

言語接触現象の類型としては、4.から7.まで分析してきた日本語起源借用語とカナ表記韓国語、韓国語起源借用語、ハングル表記日本語のように4分類した。そして、意味カテゴリは今村・ロング(2019:135)を参考にしたが、今回の調査で現れた意味カテゴリだけを表3にまとめた。

意味カテゴリ別使用状況から分かるように、「食品・食生活」は言語接触現象の全ての類型においてその使用が確認できた。李舜炯(2019a)、李賢貞(2019)などの従来の先行研究で主張された大邱の言語景観になかに食文化関連の日本語表記使用の急増という指摘を釜山・済州道の調査からも支持できる結果が出た。また、韓国国内だけではなく対馬や湯布院など地理的關係にある日本においても同様な結果がみられた。

次に、「概念名詞」のカテゴリにおいてもすべての言語接触現象の類型で確認できたが、「チング(友達)」「オモニ(お母さん)」「머구리(ダイバー)」「오토코(男)」「겐짱(ケンちゃん)」「고이비토(恋人)」など、「人間語彙」の使用が目立った。李舜炯(2019a:249)で「衣食住語彙」以外に「人間語彙」「時間・空間語彙」においての日本語表記も増えつつあることが指摘されたが、今回、意味カテゴリの分類仕方を異にしても、結果的には類似した傾向が分かった。

さらに、李賢貞(2019:163)では、生活用品類の商品説明に日本語表記の代わりにはせず、その意味や用途を表す傾向があると主張されたが、今回も二次借用語以外では使用が確認できていない。「生活用品」のなかでも「미싱(ミシン)」「카렌다(カレンダー)」「비니루(ビニール)」「라이타(ライター)」などの二次借用語のみでその使用が確認できている。このうち、「미싱(ミシン)」と「카렌다(カレンダー)」は『標準国語大事典』では日本語として認められている¹²⁾、「비니루(ビニール)」は『우리말샘』オープン辞書で慶尚道方言型として認定され生活のなかで使用されている¹³⁾。「라이타[raitʰa]」は日本語に近い発音表記から「라이터[raitʰa]」のように1987年規範表記が決められ、英語として辞書に掲載されているにも関わらず、今回、規範表記される前の日本語発音に近い表記で言語景観に現れている。上記以外にも二次借用語は「場所・地名」「服装・美容」「乗り物」「土木・建築」などでも使用が見られる。

なお、言語接触現象の類型別に意味カテゴリを見てみると、韓国語起源借用語のほとんどが「食品・食生活」に関わるものである反面、日本語起源借用語は「食品・食生活」以外にも「植物・自然」「乗り物」「遊び・娯楽」など、他の意味カテゴリでもその使用が確認できている。それから、カナ表記韓国語としては「副詞」「形容詞」「挨拶表現」などでその使用が見られたが、ハングル表記日本語としては「植物・自然」「宗教・伝説」「土木・建築」「動詞」「形容詞」「助詞(終助詞)」など幅広い意味カテゴリのなかで使用種も使用数最も多いことが確認できた。

以上、言語接触現象を意味カテゴリ別に分類したところ、類型による使用状況に差が確認できた。意味カテゴリと類型を合わせ持つて考えることにより、全体的に「日常生活と密接な関係があるほど借用語という意識が弱化されやすい(임흥빈2008:22)」という主張を支えるような結果につながったと考えられる。

9. おわりに

本稿では、日韓隣接地域における言語景観に注目し、日本語に入った韓国語起源借用語、韓国語に入った日本語起源借用語や二次借用語およびカナ表記韓国語、ハングル表記日本語について分析・考察した。主要な結果をまとめると、以下の通りである。

1. 日本語に入った韓国語借用語として、飲食に関する名詞が多いと知られているが、今回の日本の言語景観調査からも飲食関係名詞が確認できた。飲食名詞以外に、親族名詞、歓迎表現、誇張表現、くだけた言い方など親近感を表す慣用句や語彙がカナ表記で言語景観に使用されていることも観察された。さらに、その中にはハングルの上にカタカナルビ補助式表記になっているものから、韓国人向けにできるだけ自然な韓国語で対応できるよう努めていることがわかった。

2. 韓国語に入った日本語起源借用語においても食品・食生活に関わるものが主流をなしていることがわかった。しかし、「고이비토:(こいびと)」「타비타비:(たびたび)」「유끼:(ゆき)」「마이도:(まいど)」のように、販売している商品との直接的に関わりがないものの使用されるケースも見られた。音声的な

12) <https://stdict.korean.go.kr/search/searchView.do?pageSize=10&searchKeyword=미싱> [mishin]

<https://stdict.korean.go.kr/search/searchView.do?pageSize=10&searchKeyword=카렌다> [karendā]

13) https://opendic.korean.go.kr/dictionary/view?sense_no=718173&viewType=비니루 (ビニール)

響きの良さとポジティブなイメージから使用されたと考えられるが、これは日本語への関心や好感の気持ちから言語景観に反映された結果だと考えられる。

3. 日韓の言語景観から言語的拡散現象がみられた。韓国南部の慶尚北道方言「지짐[tsidzim]」「저래기[tsʌɾɛgi]」が日本へ移住し、交流と接触により韓国語起源借用語になったが、「チヂミ」と「チョレギ」は、日本に渡っただけでなく、中国の黒竜江省や北朝鮮の平安道などでもそれぞれ使用されているという。逆に、「머구리[mʌɟuri]」は日本語の「潜る」という意味の動詞「모글[moɟurru]」が韓国ではダイバーの意味の名詞「머구리[mʌɟuri]」で変用されている。現時点で済州道以外にソウル、江陵、浦項などの言語景観からも確認されている。言葉が国を越え、周辺国へと旅するいわゆる言語的拡散ともいえる。

4. 韓国語に入った日本語起源借用語の使用において「작크:(チャック)」「추리닝/츄리닝:(トレーニング)」のように日本語経由で借用された二次借用語の使用が目立った。しかし、二次借用語は、辞書から姿を消したり醇化対象語になったり意味が変化したりし、その使用が過去のものになっているものが多いが、「카레라이스(カレーライス)」「테이크아웃(テイクアウト)」などのように現在も日常で頻繁に使用される例も多く、その使用は現在進行形であることが分かった。

5. 意味カテゴリ別使用状況から「食品・食生活」にかかわる言葉が言語接触現象の全ての類型において使用されていることがわかった。また、「概念名詞」のなかでの「人間語彙」の多用、「生活用品」で二次借用語以外の語彙の使用はなかった結果から先行研究を支持する結果が得られた。さらに、ハングル表記日本語は幅広いカテゴリのなかで使用種も使用数量も多いことや生活に密着した語彙が多用されることが確認できた。

以上、日韓隣接地域の言語景観にみられる言語接触現象を通し、日本語と韓国語の接触状況を把握することができた。今回、日本と韓国の隣接地域という限られた調査であったため、研究結果の一般化には限界があると考えられる。今後、調査地域を拡大していくことと、今回、言及できなかった中間言語的特徴などについては今後の課題にする。

【参考文献】

- 국립국어원(1999) 『표준국어대사전』 국립국어원 stdict.korean.go.kr
 국립국어원(2016) 『우리말샘』 국립국어원 opendict.korean.go.kr
 김봉모(1998) 「우리말에 들어온 일본식 외래어 분석」 『한국민족문화』 11 부산대학교 한국민족문화연구소 pp.105-154
 배양서(1970) 『韓國外來語辭典』 宣明文化社
 손미정・이승민(2020) 「쓰시마의 한국어 언어경관에 관한 경년연구」 『일어일문학』 대한일어일문학회 pp.341-356
 양민호(2019) 「언어전파로 살펴본 해역언어학적 어휘 연구-한국어 박래어와 일본진출 외래어를 중심으로-」 『일어일문학연구』 110 한국일어일문학회 pp.103-119
 양민호(2020) 「한일 언어경관 연구의 新패러다임에 관한 고찰」 『일본학』 51 동국대학교 문화학술원 일본학연구소 pp.61-79
 오미경(2014) 「간판언어 어종의 분석으로 본 해항도시 부산의 문화혼종화 특징에 관한 고찰-관광지와 대학가, 주택지를 중심으로-」 『한국사지리학회지』 24-1 pp.103-119

- 이상규(2009) 「한·중·일의 외래어 수용 정책」 『국어 형태·의미의 탐색』 역락 pp.693-720
- 이지호(2020) 「일본 음식점의 명명법-3개 대학 주변 조사-」 『韓国日本語学会 第41・42回 国際學術発表大会』 韓国日本語学会 pp.111-116
- 이종국(1937) 『鮮和兩引모던朝鮮外來語辭典』 京城 漢城圖書株式會社
- 임흥빈(2008) 「외래어의 개념과 범위의 문제」 『새국어생활』 18-4 국립국어연구원 pp.5-32
- 홍민표(2006) 「한국어 속에서 사용되는 일본어에 대한 사회언어학적 연구」 『일본문화연구』 17 동아시아일본학회 pp.285-299
- 李舜炯(2011) 「看板表記にみ現代の韓国の言語景觀-大邱広域市を事例として-」 中井精一・ダニエル・ロング(編) 『世界の言語景觀日本の言語景觀』 桂書房 pp.38-53
- 李舜炯(2018) 「定点観測から読み解く大邱広域市の言語景觀」 『日本語文学』 82 日本語文学会 pp.155-174
- 李舜炯(2019a) 「韓国大邱広域市の日本語の言語景觀にみられる言語接触-日本語習得環境・社会的役割・受容状況を追究して-」 李舜炯(編) 『都市空間を編む言語景觀』 中文出版社 pp.231-256
- 李舜炯(2019b) 「大学の通常の日本語授業におけるPBL型言語景觀趙の導入と学習者評価」 『日本語教育研究』 48 韓国語教育学会 p.175-190
- 李舜炯・李賢貞(2020) 「日韓隣接地域における言語景觀の言語接触研究」 『韓国日本語学会2020年 第41・42回 国際學術発表大会(2020)発表論文集』 韓国日本語学会 pp.117-122
- 磯野英治(2020) 『言語景觀から学ぶ日本語』 大修館書店
- 市島佑紀子(2011) 「韓国地方都市の言語景觀-釜山広域市の言語景觀から見る地方都市の現状-」 中井精一, ダニエル・ロング(編) 『世界の言語景觀日本の言語景觀』 桂書房 pp.54-73
- 今村圭介, ダニエル・ロング(2019) 『パラオにおける日本語の諸相』 ひつじ書房
- 今村圭介, ダニエル・ロング(2020) 「ヤップ語における日本語起源借用語の特徴」 『日本語の研究』 16-2 日本語学会 pp.152-167
- 李賢貞(2019) 「韓国の商品販売市場の言語景觀に見られる日本語の使用実態」 李舜炯(編) 『都市空間を編む言語景觀』 中文出版社 pp.147-165
- 李賢貞・李舜炯(2020) 「言語景觀にみる『エントランス言葉』のストラテジー」 -福岡市を事例として- 『日本語文学』 90 日本語文学会 pp.201-225
- 金恩希(2004) 「言語の接触と借用のプロセス-済州道での日本語の借用を中心に-」 『日本語学研究』 10 韓国日本語学会 pp.5-19
- 斎藤敬太(2020) 「観光資源としてのことば-日本国内の活用事例を中心に-」 『日本語学』 39-3 pp.118-127 明治書院
- 趙恩英(2017) 「大邱広域市の観光地に見られる言語景觀について-都心循環コスと近代文化路地の表記を中心に-」 『日本文化研究』 64 東アジア日本学会 pp.293-313
- 孫美貞(2019) 「対馬の韓国人観光客の密集地域における言語景觀-比田勝港厳原港を中心に-」 李舜炯(編) 『都市空間を編む言語景觀』 中文出版社 pp.101-120
- 陣内正敬(2007) 『外来語の社会言語学-日本語のグローバルな考え方-』 世界思想社
- 吹原豊・松崎真日・磯野英治・助川泰彦(2019) 「韓国安山市の多言語景觀にみる言語景觀研究の現在と可能性」 『ことばと文字』 11 公益財団法人日本のローマ字社 pp.21-57
- 彭国躍(2018) 「百年前頃の上海の景觀言語と景觀文字の記述研究」 『人文学研究所報』 59 神奈川大学人文学研究所 pp.73-98
- ロング, ダニエル(2004) 「島の言語の二つの顔-接触と孤立のはざままで-」 『言語』 33-1 大修館書店 pp.42-50
- ロング, ダニエル(2011) 「世界の少数言語の言語景觀に見られるアイデンティティの主張」 『世界の言語景觀日

本の言語景観』桂書房 pp.3-12

ロング,ダニエル(2013)「言語接触と言語混交」 多言語化現象研究会(編)『多言語社会の日本-その現象と課題-』 三元社 pp.133-145

ロング,ダニエル(2018a)『小笠原諸島の混合言語の歴史と構造-日本由来の多文化共生社会で起きた言語接触-』 ひつじ書房

ロング,ダニエル(2018b)「日本語表現法における言語学的課題の分類を考えるツールとしての言語景観の応用について」『首都大学東京教職課程紀要』2 首都大学東京 pp.51-64

ロング,ダニエル(2020)「北海道における文化的観光資源としての言語-言語景観で活用される北海道方言とアイヌ語-」『韓国日本語学会 第41・42回 国際学術発表大会』韓国日本語学会 pp.123-126

〈 요 지 〉

언어접촉에서 본 한일인접지역 언어경관

본 연구에서는 한일 인접 지역의 언어 경관에 주목하여 언어접촉현상에 대해서 분석 고찰하였다. 주요 결과는 다음과 같다.

1. 일본어에 유입된 한국어 기원 차용어와 한국어에 유입된 일본어 기원 차용어의 공통된 특징으로 식품·식생활과 관련 어휘가 주류를 이루는 점을 들 수 있다. 일본어에 유입된 한국어 기원 차용어에는 한글 위에 가타카나 루비 보조식 표기(덧말표기)가, 한국어에 유입된 일본어 기원 차용어에는 한글과 일본어를 나란히 병기하는 형태의 표기패턴을 확인할 수 있었다.
2. 한국어 방언형의 확산이 확인되었다. 한국 경북 방언인 「지짐[tsidzim]」 「저래기[tsarɛgi]」가 일본으로 이주, 교류와 접촉에 의해 한국어 기원 차용어로 사용되고 있으며, 이들 어휘들은 일본뿐만 아니라 중국 하이룽장성과 북한 평안도 등에서도 각각 사용되고 있다고 한다. 이를 통해 말이 월경(越境)하여 주변국으로 여행하는 이른바 언어적 확산 양상을 분명히 하였다.
3. 한국어에 들어온 일본어 기원 차용어의 특징으로는 「작크[tsaku]」 「추리닝[ts^hurinɯŋ]」과 같은 일본어를 경유하여 차용된 2차 차용어의 사용이 두드러졌다. 이러한 2차 차용어는 「테이크아웃(take out)」 등과 같이 현재도 그 사용이 계속되고 있음이 밝혀졌다.
4. 의미 카테고리별 사용 현황을 통해 '식품·식생활'은 언어 접촉 현상의 모든 유형에서 확인되었다. 또한 「개념명사」 중 「인간어휘」의 사용이 많고, 「생활용품」에서는 2차차용어를 제외하고는 거의 사용되지 않는 점에서 선행연구를 지지하는 결과를 얻을 수 있었다. 전체적으로 한글 표기 일본어는 의미 카테고리 안에서 다양한 형태로 다용(多用)되고 있음이 밝혀졌다. 이를 통해 생활과 밀착된 어휘의 사용이 집중되고 있음도 확인할 수 있었다.

논문분야 : 사회언어학

키워드 : 언어경관, 언어접촉현상, 2차 차용어, 가나표기한국어, 한글표기일본어

■ 이순형(李舜炯 Lee Soonhyeong)

경북대학교 인문학술원 연구원

soonhlee@knu.ac.kr

■ 이현정(李賢貞 Lee Hyunjung)

경북대학교 일어일문학과 강사

nezumi80@naver.com

■投稿日	:	2020년	9월	30일
■審査開始	:	2020년	10월	18일
■審査完了	:	2020년	11월	1일
■掲載確定	:	2020년	11월	20일

www.kci.go.kr